



地域振興と人材育成

古くは城下町として栄え、また福沢諭吉に代表される知識人が多く輩出した学問のふるさとである中津市に、本年4月、全国で6番目の大分県立工科短期大学校が開校しました。九州の玄関口である北九州市の小倉から特急で約30数分の日豊線沿線にあるこの中津市は、周りが田園地帯で囲まれた、古い家が軒を並べる落ち着いた雰囲気のある街です。歴史的には、中津は豊臣政権の時代に黒田孝高氏が中津城を築城したのをきっかけに豊前の国として発展し、幾多の変遷を経ながらもずっと小倉藩の藩政下がありました。大分県に編入されたのは、廃藩置県の後、1876年です。したがって、このような歴史的背景とともに、福岡県との県境に位置するという地理的条件が、中津の生活あるいは文化に大きな影響を与えています。中津市という一地方都市の例ですが、地域の活性化を図るための地元産業の振興は、県境にまたがる比較的強い結びつきにある経済圏、文化圏の中で考えられなければなりません。

昨今の厳しい経済情勢では、生き残っていくためには、製造業においてもより高度で強力な技術力が必要とされてきております。当地域における差し迫った問題は、企業あるいは工場が進出してきても、企業がすでに持っている高いレベルの技術に対応できる技術力があるかないか、それが往々にしてない場合が多く、せっかくの仕事も地域外（県外）に流出してしまうということです。そこで、早急に高度な技術力を備えることが課題となるわけですが、早急といっても、ある程度時間をかけて人材を育成することが最も確実な方策といえます。また、例えば自動車あるいは半導体等の産業における精密機械加

工技術は、NC工作機械のハードおよびソフト両面にわたる急速な進展により、設備さえあれば良い品ができて、生産品に優劣がつけ難くなり、国内外を問わず価格の過当競争になってしまうのが現状です。これからは、そこにそれ相当の独創性が付加されなければならず、独創に基づく固有の優れた技術を持つことが必須です。

大分県では県北国東テクノポリスなどの推進により、半導体メーカ、精密機械メーカ等ハイテク企業の立地集積が進み、中津市はこの県北国東の工業中核都市として位置づけされております。工科短期大学校は、主にこの地域の技術の拠点として、また同時に県内企業に対して即戦力のある実践的技術者を育成するために設立されました。地元大学工学部の卒業生がほとんど県外に就職してしまうのは大分県も例外ではありません。そこで地元企業に技術者を核として送り込み、企業と共に育てていくことが本校の重要な役割となるわけです。パイタリティに富んだ若い技術者が地元に着定して、大いに活躍し、地元産業の振興に貢献することを期待しています。今、頭に描いている技術者像とは、基礎知識をきちんと身につけており、社会的要請、社会情勢の変化に敏感に対応できて、そして挑戦する意欲を持っている、そんな人材を育てたい、育ってくれればと思っております。

ときた ゆうじ

略歴 昭35 東京工業大学理工学部卒業、三菱造船(株)入社
昭39 三菱重工業(株)技術本部長崎研究所に転籍
平4 大分大学工学部教授
平10 現職、現在に至る